

The Politics of Catastrophe and the Impact on Japan

——大惨事の人類史と日本への影響

スタンフォード大学シニアフェロー ニーアル・ファーンガソン

歴史を振り返ってみると、災難や災害の連続ともいえる。

日本でも、7月上旬、戦後の最も偉大な指導者の1人である安倍晋三元内閣総理大臣が暗殺されるという大惨事が起きた。この事件により、世界中が大きな衝撃を受け、長年にわたり安倍首相を尊敬してきた私も例外ではない。しかも、政治的に極めて安定しているはずの日本で起こったことで、とても重く受け止めた。実は、最近ではあまり起きていなかったものの、日本において政治的な暗殺は長い歴史がある。このような惨事を見ると、歴史は繰り返しているように感じる。

ただ、歴史はそのまま繰り返すわけではなく、それぞれの事件を見るとかなり性格が異なっている。日本でも1930年代に比べて、政治的な暗殺の持つ意味は重要性を失っている。

終わらない大惨事

100年前の世界は、第1次世界大戦の後にスペイン風邪という大惨事に見舞われたが、今では新型コロナウイルスによるパンデミックを経て、ロシアとウクライナとの戦争に直面している。他方、現在の大惨事は、過去のものと比べればそれほど驚異的ではない。コロナ禍は最大級のパンデミックではあるが、14世紀の黒死病や1918〜1919年のスペイン風邪に比べれば、世界人口比の死者はかなり少なく、最悪とまではいえない。また、ウクライナでの戦争も、これまで数百年の間の大きな戦争と比較すれば、まだ小さい規模といえると思う。

しかし、大惨事がこれで終わりとはならないことを我々は理解しなければならない。ウクライナでの戦闘は、1973年の第4次中東戦争を思わせる。両者は、経済面でも

似たような影響を及ぼしている。第4次中東戦争を受けたアラブ諸国による原油の供給削減がエネルギーや食料品の価格高騰をもたらしたように、ウクライナでの戦争は、ロシアによる黒海封鎖とも相まって、インフレを引き起こしている。国連によれば、最近の食料価格指数の高騰は1970年代半ばに匹敵する。

他方、第4次中東戦争が数週間で終わったことを踏まえると、現在の戦争は、むしろ米ソ冷戦下の朝鮮戦争のようである。半年近く続いているウクライナでの戦争は、長く引くことが予想される。ロシアがドンバス地域と南ウクライナを支配して勝利を宣言したとしても、ウクライナ政府がそれを受け入れるとは思えない。戦争は続き、平和の合意はない。米ソ間の「第1次」冷戦下では、朝鮮戦争の和平合意は成立しなかった。

歴史は繰り返すわけではないが、韻を踏

んでいる。「第2次」冷戦が起きるとすればどうなるか。米ソ冷戦下での米国の主要な敵国はソ連であったが、今は中国である。米中が経済的にほぼ統合されていたと思われた（Chimerica）時代は終わり、米中冷戦の時代、そしてトランプ政権下では貿易戦争のようなことも起きた。さらに、最近では、台湾について米中両国の政治家が強気な発言を繰り返している。

第1次冷戦下では、ソ連が核大国になり、キューバを巡って第3次世界大戦が勃発する寸前にまで陥った。台湾を巡って、キューバ危機が再現される可能性があることは、大きな政治的リスクである。キューバ危機が奇跡的に回避された幸運が、台湾で起きるかはわからない。しかし、キューバ危機が繰り返されることは避けなければならない。もし第2次冷戦の状況にあるとすれば、第

3次世界大戦を回避するためにデタント（緊張緩和）をすぐに追求すべきである。

2014年のダボス会議（世界経済フォーラム年次総会）で登壇した安倍首相（当時）が、現代の世界と100年前の状況が似ていると話していたことを覚えている。第1次冷戦において米国の主要な同盟国はヨーロッパであったが、もし第2次冷戦にあるとすれば日本が重要な同盟国である。米国の同盟国であるということは、大きなリスクが伴う。安倍元首相はそれをよく理解していた。

大惨事の中の希望と変わらないもの

惨事が起こると忘れがちになるが、連なる惨事の底流には、実は明るく前向きな潮流もある。それは、科学や技術の進化である。惨事は起こるが、科学的な知識の蓄積や技

術的な進化はとどまることがない。産業革命以降、イノベーションは持続的な経済成長や問題解決をもたらし、生活水準を大幅に向上させてきた。新型コロナウイルスとの闘いでも、多くの科学者の膨大な努力によって、ウイルスの解明が進み、ワクチン或いは治療法を見つけた。だからこそ私は、人類について楽観できる。政治が機能不全に陥っていたとしても、科学は惨事を避けるための最もパワフルな道具であり続ける。

他方、変わらないものもある。技術の飛躍が我々のコミュニケーションや仕事の在り方を変えても、我々は同じような感情を持ち続ける。そこにあるのは、昔からの、権力と愛情、羨望のゲームである。人間はこれまでと同じような衝動を持ち、これまでと同じ理由で紛争が起きる。その意味では世の中は変わらず、全く認識できないような世界ではない。そして火山の噴火や地震といった惨事は続き、科学技術で止めることはできない。

歴史を学ぶということは決して時間の無駄ではない。究極的には、不変なものについて学んでいるからである。人間の苦しみの中で変わらないものを学ぶことは非常に重要である。



Niall Ferguson © Zoë Law 2019

Profile

1964年、スコットランド生まれ。オックスフォード大学博士。歴史・経済史が専門。オックスフォード大学教授、ハーバード大学教授などを経て現職。アドバイザー会社 Greenmantle 創業者。これまでに16本の著書があり、2004年にはTime誌の「世界で最も影響力ある100人」に選ばれる。最新著『大惨事の人類史』（東洋経済新報社、日本語版：2022年5月20日出版）では、人類が経験してきた大惨事に共通する構造を明らかにし、世界や組織が抱える脆弱性と回復力の解明を試みている。